
妖の巣食う屋敷

時間刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖の巢食う屋敷

【Nコード】

N5072X

【作者名】

時間刹那

【あらすじ】

とある城下の近くの山に佇む一軒の屋敷。

その屋敷は、城下で「妖の巢食う屋敷」として有名な建物だった。

ある日、そんな屋敷の前に一人の赤子が捨てられていた。

屋敷に巢食う妖たちは捨てられたその赤子を育て、人の子として普通に育てた。

それがすべての始まりだった…

はじまりの日

ねえ、この噂を知ってる？

にぎやかな町のある遊女たちの間でささやかれる言葉。

あの山にある屋敷…あそこには古くから、妖が住み着いているだって。

小さな声で、しかし断定的な口調で話す花魁。

だから、昔の人たちはあの屋敷をこつ呼んだらしいわ…。

女が間をおく。

「妖の巢食う屋敷」、と…

ここは、城下の近くの山に佇む一軒の屋敷。

その一画で今日もまた、深夜二時だというのに騒いでいる連中がいた。

ガラッ

勢いよく少年が襖を開けると、その先にはいつもの事ながら、奴らがいた。

「おや？翔…久しぶりだな」

部屋の奥に座す、一匹の毛並みのよい大きな狼（？）に声をかけられた。

「ええ…お久しぶりです、氷狼様…半年ぶり…ですね？」
軽く会釈する少年。

奴らとは、妖のことだ。

そう、ここは城下で噂の「妖の巢食う屋敷」。

ここには、翔以外の人間はいない。

正確に言うのなら、翔も人間ではない。

それが、この屋敷の現状だった。

「おお？翔じゃねえか！久しぶりだな！！」

「久しぶり、炎龍」

微笑む翔。

皆と軽い挨拶をしながら、部屋の奥の氷狼の近くに寄っていく翔。

久しぶりに翔が来たことに驚き、そして喜ぶ妖たち。

「みなさん、お待たせしました。」

やっと…やっと、す

べての習得が終わりました！」

翔の言葉に歓声が沸きあがる。

「おっそいぜ、翔！」

炎龍が自分よりかなり小さな翔を持ち上げる。

「わ、わっ、あああ！炎龍おろしてよ！」

持ち上げられた翔は足をじたばたさせ、降りようとする。
が、もちろん降りれない。

「もう…。翔は元は人間なのよ？」

あきれた様子で言う雪女。

「砂雪の言つとおりだ。」

翔、今日からお前が我ら妖

の妖羅だ」

氷狼が静かに言う。

「我らの力を今、お前に授けよう」

氷狼の体が淡く光りはじめる。

他の妖たちも同様に光りはじめる。

「我^{わが}血に眠りし力よ。今この場にて解き放て」
翔の中に妖たちの光が流れこんでゆく。

「うっ…」

悲痛な声を漏らす翔。

「大丈夫か？」

心配そうにそばにより、声を掛けてくる炎龍。
その問いに微笑み、無言で頷く翔。

「多くの時が流れても、我^{わが}血に誓い、そなたらと契約を交わす」

いっそう激しく翔の中に光が流れ込む。

それは、そのあとすぐに終わった。

「はあ、はあ…、はあ…」

荒い呼吸を繰り返す翔。

「思っで、いたよりも、きつかったや…」

「ははっ、先代も通ってきた道だぜ？それくらい我慢しろってこと
だ」

（は、はは…。簡単に言ってくれる…）

「さて、翔。今をもって、お前の人間としての“生”が正式に終わ
った。これでお前も妖だ」

「…複雑ですね。完全なる妖の体というものは…。血が暴れている
…っていうのかな？」

「そうだ。それを押さえ込んでいるのが今の俺たちだ。例外は、町
の外の奴らだ」

炎龍が神妙な面持ちで言う。

「いいか、翔。その血に吞まれるな…お前はお前だ。そこを違^{たが}える
な」

「うん…分かったよ、炎龍」

「さて…翔が完全なる妖になったってことは今日が妖としての誕生日だな！」

「そうなるね」

(やな予感しかしない…なんでだろう…)

「今から誕生日会だーーーーー!!」

おおおおーーーーー!!!

(え)

「でも、深夜三時だよ？今からは…」

「何言ってるんだよ！妖の時間はこれからだぜ!!」
と、炎龍が言くと妖たちは宴をはじめた。

「…僕も知らない…」

そう翔は言い残して、忽然と姿を消した。

はじまりの日（後書き）

長くなってしまうし訳ない…。

人間

「…母様、神様っているの？」

幼い子供が小さな声で母親に聞いた。

「しいー！そんなこと、今口にしてはいけません！！」

母親は人差し指を口元に当て、小さな声で子供を叱った。

「ごめんなさい…」

素直に謝る子供。そして、そんな子供をそつと抱く母親。

「いい子ね…もう少しの辛抱だから…ね？」

子供は、母親の言葉に小さく頷いた。

「おい、女とガキ」

背後から急に声をかけられた二人は驚いた。

「何でしょうか、お役人様」

落ち着いた口調で答える母親。

「今、神がどうか言っていたな？」

「いいえ、そんなことは一言も申しておりません」

あくまで白を切る母親。

「いいや、言った。少なくとも俺にはそう聞こえた。よって、お前らを死刑とする」

「そんな…！私たちはそんなことは一言も申しておりません…！」

そんなことは知らない、と言いつ刀を抜く役人。

「ま、待って下さい…！どうか、この子だけはお許し下さい…！」

土下座して許しを請う母親を「邪魔だ、ドケ…！」と言いつ蹴り飛ばした。

「母様…！」

母親に近づこうとする子供の前に役人が立ちふさがる。

「…誰か、私…の子供、を助け…て」

涙を流しながら言う母親。

驚きの声を上げる役人。

それもそのはず。男の振り下ろした刀は、子供に届くことなく、二人の間に割り込んだ男が両手で振り下ろされた刀を片手で止めた。しかも、その男の手は手甲というにはあまりにも薄い布をはめた素手と言っても過言ではない手で止めていた。

城下町

「て、てめえは何者だ!!」

建物の影のせいで男の顔がよく見えない。

「何者だつて聞いてんだよ!」

男は吸っていたキセルの煙をはいた。

フ

月明かりが男の顔を照らし出す。

役人の顔が明らかに青ざめていく。

「お、お前は…!!」

役人は何か言おうとしたが男の声にさえぎられた。

「うせる、目障りだ」

男は役人の刀を握ったまま、役人の腹に膝蹴りをかました。

「グアツ!!」

なすすべもなくその場に崩れ落ちる役人。

男は目障りな奴は消えた。用なし。

とふんだのか、何も言わずにその場から立ち去っていった。

「久しぶり、翔^{かける}クン」

翔は背後から急に声をかけられた。

振り返るとそこには一人の少女がいた。

「久しぶり、佐山」

「三年ぶりかな？懐かしいなあ」

「そうだな…」

笑顔で答える翔^{かける}。

が、その笑顔には「用がないのなら話しかけるな」としつかりかかれていた。

「今私ね、そのてい食堂で働いているの。君は？」

「うん、まあ、それなりにやってる」

（世間話してきたのかよ）

「え、何それ。教えてよ」

苦笑いを浮かべる翔^{かける}。

隠す気すら起きない。

（早くここから立ち去りたいんだが…）

「あ、いたいた。こんなところで何してんだよ、翔^{かける}」

話に割り込んでくれたのは一人の大柄な男だった。

「ったく、ちよつと休憩入れてくるって行ってから、どれだけ経つてると思ってるんだよ！」

「悪い、昔の知り合いにあつてな会話に華を咲かせてたんだよ」

（ぐつどタイミングだ、炎龍…！）

「ったく、帰るぞ翔^{かける}」

そついうと翔^{かける}の腕をつかんで引つ張つていこうとする炎龍。

「まあ、そついうことだから。じゃ」

炎龍の手を振り払うと翔^{かける}は炎龍に続いて人ごみの中へと消えていった。

「ったく、相変わらず人間に関わりやがって」
ぼやく男。

「いいだろ別に、元は人間だし。それにさっきのは向こうから話しかけてきただけだ」

「元、な。今はもう妖だつてことを忘れんなよ」

言葉を詰まらせる翔。

「なあ、炎龍」

急に立ち止まる翔。

「なんだよ、急に立ち止まったりして」

頭の後ろで腕を組みながら振り返る炎龍。

「僕はなんていう名前：種類の生き物なんだろう」

真顔で翔の顔をのぞく炎龍。

「お前：頭でも打ったか？」

ブチッ

何かが切れる音がした。

はぁ

長いため息をもらす翔。

「：うん。お前に聞いた僕が悪かった」

そうつぶやくと家へ、別名『妖が巢食う屋敷』へと帰るべく、とまった足を動かさしはじめた。

「おい！」

炎龍が後ろから怒鳴っている。

「どういう意味だ、そりゃ！！」

「そのままの意味だ」

そっけなく返す翔。

（屋敷に帰ったら、砂雪にでも聞かか…）

後ろではまだ何か炎龍が言っている。

（無視無視…）

そう心の中で言うと、翔はそのまま足早に城下をあとにした。

妖と人

「ただいま」

翔が屋敷の扉を開けるとそこには一人の少年が立っていた。

「おかえり…翔…」

そう言うとなぜか頬を赤らめて屋敷の奥へと少年は逃げるように走り去っていった。

「ひゅ〜、翔はモテモテだな」

「炎龍：白虎^{はくと}はただ恥ずかしがっているだけだと思っただが…」
気にしねえ〜、と言い残し炎龍も屋敷の奥へと入って行った。

大広間の襖を開けると案の定妖怪たちが昼だというのにドンチャン騒いでいた。

(…昼間から…頭痛が…)

目頭をおさえる翔。

「いい加減なれたらどう?」

酒瓶を片手に持ちながら言う女。

「俺的には慣れたくないなあ…慣れたって言う砂雪がすごい…」

苦笑いする雪女の砂雪。その顔は酒のせいか少し赤みを帯びている。

「もう十年か…早いわね…翔も今年で二十三になるのね…」

感慨深そうにつぶやく砂雪。

「俺はもう人ではないからな…しばらく死ぬことはないだろうし、そんなことを十年立つ度に言ったら疲れるぞ?」

微笑む砂雪の顔は、とてもうれしそうだった。

(砂雪、うれしそうだ)

心の中で翔は素直にそう思った。

「翔、帰ってたのか」

上座に座る大きな狼の妖が言った。

「ああ、ただいま氷狼様」

にこやかに返す翔。

頷き返す氷狼。

そんな軽い挨拶を済まし、さらに奥へと翔は入っていった。

「にしても」

部屋の奥では相変わらず、妖怪が飲んだくれていた。

（まだ、日が出てるってのに……つたく……はあ……）

翔は心の中で人知れずため息をついた。

「いいじゃないか、仕事も今はないんだし」

酒を飲みながら言う青年。

「水龍…何があつたんだ…？」

足元で酒瓶をあおる水龍に目をやる翔。

「何って、見ての通りとしか言いようがない……」

上半身をさらけ出した状態で、酒瓶をあおっている水龍。

「そつか…どんまい…」

水龍から目を逸らす翔。

「つたく…なんだって俺がこんな格好をとさせられんだ…？」

「水龍、とりあえず袴をきちつと着ろ」

つたく、とぶつぶつ言いながら袴をただす水龍。

他の妖怪たちも水龍と似たような格好で酒を飲んでいた。

「さて、全員聞いてくれ」

翔が話し始めたたとんにその場の妖怪たちが酒を飲む手を止め、翔のほうを見た。

「城下の辻斬りが、ついに俺たちの仲間にも手を出してきやがった」

ザワザワ

ざわめく妖怪たち。

人間の分際で…

俺たちに勝とうなんざ百年早いんだよ

と口々につぶやく妖怪もいる。

「それもあり、城下の仲間から正式な仕事の依頼がきた」

この屋敷に巢食う妖たちは毎晩遊んでいるわけではない。

仕事というのは、城下町に住まう妖怪たちの依頼に応じて行っ、いわゆる何でも屋だ。

遊んでいる日の方が圧倒的に多いのは否定しないが…。

何日かに一度城下町に住む妖怪たちからの依頼がくる。「人間が俺らを苛めてくる！助けてくれ！」など内容はさまざまだが、人間を懲らしめてくれというような依頼がくる。そんな仕事をこの屋敷の妖たちは主に生業なりわいとしている。

人間だからといってむやみやたらに殺すと、翔に逆に殺されるし、殺さないでおくとまたやる阿呆もいる。見極めが大切な仕事なのだ。そんな見極めをし、人間と妖怪の微妙な均衡を保たせるのが、その間の存在である“妖遠ようえんの妖”あやかしの役割であり、責務だ。

そして、妖羅という妖を従える陰陽師の称号を持つ翔は、妖と人間の間の存在でありながら式神を操り、妖の主であるため、妖羅として妖すらも容易に操ることが出来る。

そんな翔は…歴代の妖遠の妖たちは、常に妖と人間を平等に見なければならぬ。

そのため、歴代の妖遠の妖たちはその重荷に耐え切れずそのほとんどが自害した。

黙って翔の話聞く妖怪たち。

「今夜、そいつを討つ！」

先程までとは違う張り詰めた空気をだす翔。

「確か一ヶ月程前から盛んになったやつだったよな」

あくまで確かめるように言う炎龍。

「ワシの調べだとここ一ヶ月で約四十人以上の人間を殺している」「ずいぶん前から噂されていたのか、次々に調査結果を報告する妖たち。」

その中で翔の耳にひっかかる言葉が聞こえた。

「そいつの手口がまたひどいんすよ…。首を刎ねたり、体の一部を切り落としたり…」

「それは本当か、煉」

無言で頷く茶髪の青年。あどけなさの残るその顔には不釣り合いな角が一本頭から生えていた。

「…よし 用意をしとけよ、お前ら」

頷きそれぞれ散っていく妖怪たち。

「分かった、今ここにいない奴にも伝えておく。お前も用意をして

こい、翔」

「ああ」

翔はそう短く答えると、大広間を出た。

妖落 - あやかしおち -

夜になり、玄関口に集まった妖怪たち。

翔の指示を聞き、行動に移り始める妖怪たち。

「さて…以上が今回の仕事の役割だ。今回は今までの奴と違う
会ったことは無いはずだが言い切る翔。

「見えたんですかい？」

たずねる青い子鬼。

その質問に無言で頷く翔。

翔の答えにざわつく妖怪たち。

「落ち着きな。翔はいつも言ってるだろう？“変えられないことな
んて何一つ無い”って」

壁にもたれかかっている首の無い少女が言う。

「凜の言うとおりだ。変えられないことは無い」

全体を見渡しながら言う翔。

誰一人として翔から目を逸らさずにいる。

「行くぞ。俺らの仲間に手を出したことを後悔させてやるぞ」

「散」

翔がそう言った次の瞬間には翔を含め、誰一人としてその場にな
かった。

「ヒック…うい…飲みすぎたかあ、ひっく」

酒瓶片手に千鳥足で歩く男。

どん

正面から来ていた人間とぶつかり、その場にしりもちをつく男。

「うい…ヒック…おっと、すまねえ…ヒック」

「こちらこそ…すまねえな…ここらには最近辻斬りが出るらしいから」
気をつけて帰れよ、そう言いきる前に正面から来た人間は首からまるで噴水のような血しぶきをあげた。

「え…？」

啞然とする男。

正面から来ていた人間の後ろにいる人影が手にしているのは、一本の刀。

その刀身は血にまみれ紅く染まり、たくさん刃毀れしていた。男自身も、返り血を浴び紅色に染まっていた。

「辻斬りには気をつけるよ？あの世でな」
刀を横に薙ぐ血まみれの男。

「…！」

声にならない悲鳴をあげ、切り裂かれる酔っ払いの男。
その体は真つ二つに切り裂かれていた…。

「まだだ…まだ足りない…。 なあ？鋼鐵^{こうてつ}。もつと…もつとた

くさんの血を…」

月明かりに照らしだされる血まみれの男と刀

鋼鐵。

その姿はさながら、人を捨てた妖のようであった…。

「これは…」

翔たちの足元には、二つの死体。

「ひどいことをする…」

(これが人のすることなのか…？)

片方の死体は首が刎ねられたのか、横に首が転がっている。
もう片方の死体は、体を上半身と下半身とに斬られていた。

「まだ新しい…」

翔がつぶやいた。

「追えるか…白虎？」

翔が白虎に問う。

「匂いが残っている…今ならまだ追える」

「よし、辻斬りを追うぞ。」

白虎、お前の後に俺らはい

ていく…先行を頼む」

白虎が無言で頷くと、翔たちは白虎を先頭にその場を去っていった。

時は遡ること数分前、同じ場所にて…

「これは…」

一組の男女の足元には二つの死体。

「妖の仕業か…？」

男の方が目を細めながらつぶやいた。

「違うわ…この感じ…妖にしては汚いわ…。妖はもっと綺麗に殺すもの…」

女の方が答えた。

「…だとすると…妖落…か…？」

「十中八九そうでしょうね…」

無言になる男女。

沈黙を破ったのは、男の方だった。

「行こう…早く探して始末しなければ…」

「ええ」

そういうと、二人は去っていった…。

ポチャン

流れ落ちる鮮血。

下に広がっているのは、真っ紅^かな血だまり。
その中心に立つ一人の血まみれの男。

ポチャン

男の持つ刀から血が流れ落ち、刃が紅^{あか}く光って見える。

「あと少しだ…あと少しで…」

リイ

ン

「待ちどうしいか？鋼鐵。

あと少しだ…あと少しで俺は…

俺たちは…」

何だ！？今の音は！？

遠くから聞こえる人の声。

(チツ…役人か…まあいい)

立ち去っていく男。

(今日は満月か…)

空を見上げ、男は思う。

「明日は十六夜…俺が

には最高の月だ…」

急に吹いた風により、男の声がかき消された。

「ふっ」

男はそう言い残すと、闇へとまぎれていった…

陰陽師

月明かりが城下町を明るく照らす。

「十六夜…」

翔は一人つぶやく。

(昨日は結局見つけられなかった…)

昨晩

「匂い…こつち…」

白虎を先頭についていく翔たち。

カサツ

屋根の上を走る翔の耳に人間なら、ほかの妖なら絶対に気付かないような小さな音が聞こえた。

「誰だ!?!」

翔が立ち止まり、一点を見据え構えをとる。

翔の行動に一同もまわりを警戒し、それぞれ構えた。

「さすがは妖。

あんな小さな音でも感づいたか」

一組の男女が翔の見据えるところから出てきた。

「何者だ!」

炎龍が翔を背後に庇う形で一步前が出る。

「お前たち妖の天敵…といえば分かるか?」

「…陰陽師か」

翔がつぶやいた。

「こ名答。」

本来なら、すぐに滅めしたいところなんだが…」

男が語尾を濁す。

「辻斬りか」

「…ご名答。奴はおそらくもうすぐ」

「修羅の妖となるだろう」

翔が男が言う前にそう言った。

「ほう…ということはお前たちも辻斬りを追っているのか？」

「ああ。仲間が何人か殺されたからな」

「…意外だな。妖にも仲間を思いやる心を持ったやつがいるんだな」
ふんつ、と鼻を鳴らす男。

と、次の瞬間！

「！！！」

男が声にならない悲鳴を上げた。

獣のような耳を持った女が、男の首にクナイをあてた。

そのクナイは、男が少しでも動けば確実に血があふれ出すほどにまで密着させている。

「…調子に乗るなよ人間。我らの主を侮辱する奴は誰であろうと許さん！」

ものすごい殺気をほとばしらせながら、女は言う。

「やめろ、猫娘」

「しかし…」

翔が猫娘にそつと微笑む。

「主がそういうなら…」

クナイをどけ、翔の後ろへと戻る猫娘。

「さて…」

おもむろに口を開く陰陽師。

ふう

口に銜えていたキセルの煙を吐きだす翔。

「妖の主…お前に少し、話がある」

交渉

「なんだ？」

翔が疑^{うたぐ}るような眼差しで男を見据える。

「…辻斬りを倒すのにお前ら妖の力を貸してくれ」

男の言葉に、衝撃が走る。

「ちよつと、兄さん！いくらなんでもそれは　　！！」

沈黙を決め込んでいた隣の女が口を開いた。

「何で妖^{おれい}が人間に手を貸さねえといけねえんだよ！！」

炎龍が激しく抗議する。

激しい言い合いが続く。

その論争を止めたのは、翔だった。

「いいだろう。」

陰陽師、お前らに協力してやる」

「ちよつ、いいの!？」

砂雪が抗議する。

「こちらが出す条件を呑めるのならな」

不敵に微笑む翔。

（（うつわあ…翔つてば腹黒いの全開だあ…））

妖たち全員が心の中でそう思った。

もちろん口には出さなかったが。

「で、どうするよ？陰陽師」

「…内容にもよる…」

「そつこねえとな」

さらに笑みを深くする翔。

「まず一つ、むやみやたらに何もしていない妖を滅するな」

「…心がける…」

「やれ」

「…分かった」

翔が男を完全に圧倒する形で交渉が進んでいく。

「二つ目、妖たちをもっと利用しろ」

「…というと？」

男が訳がわからないというような顔で翔に問う。

「今回のこの辻斬りにしてもそうだが、妖たちは闇に巢食う者だ。

情報収集も得意だし、戦闘や傷の治療を得意とする奴もいる」

「…そんな奴らを、ある程度の範囲の規律を作り、利用しろ…とい

うことか？」

無言で頷く翔。

「この二つを守るって言うのなら、今回だけでなく、さっきも言ったようにこれから先も協力してやるよ」

考え込む男。

「十数える。その間に決める。それ以上は待たない」

「十」

翔のカウントダウンが始まる。

「九」

皆が息を飲む中、男が必死に考える。

「八」

「七」

「六」

「五」

(残り五秒をきった！

兄さん…早く!!)

「四」

「三」

「二」

「一」

最後の数が読まれた。

「さあ、陰陽師。答えを聞こうか」

不敵に微笑む翔。

「…分かった…いいだろう。その条件を受け入れよう」
「交渉成立だな」

キセルの煙を吐き出す翔。

「俺のことは、そうだな…なんとも呼んでくれ。

お前は?」

「龍ヶ崎出だ」

男が一步後ろに控える女に目をやる。

「私は妹の、龍ヶ崎律々那と申します。」

ぺこり、と頭を下げる律々那。

「なら、そうだな…妖は長生きなんだよな?」

確かめるように問う出。

「ああ。人間の倍以上を生きる奴がほとんどだな」

「なら、お前にとってこの時が一瞬…ということか?」

「まあ、そうなるな。時間の感じ方が違うからな」

出の問いに必要な最低限の答えのみ発する翔。

「決まりだな。俺らは、お前を瞬と呼ぶ」
「俺から見たお前たち…というわけか…。いいだろう」

「さて、自己紹介も済んだことだし…辻斬りを捕まえに動かねえとな…」

と、翔が言い終わった頃にちょうど空が明るくなり始めた。

「朝だ…」

白虎がつぶやいた。

「残念、俺らは昼間動けねえんだわ」

形だけは詫びる翔。

「承知している」

「なら話は早いな。」

また、今晚にでも会おうや」

そう翔が言い残すと、風と共に妖たちは消えていた…。

「よかったですか、兄さん」

律々那が出に問う。

「ああ。こちらにも利があった…問題ない」

そういうと出は、律々那の頭を乱暴に撫でた。

「子供扱いしないで下さい!!」

頬を朱に染め、むくれる律々那。

「俺たちも一度戻ろう」

出がそういうと、無言で律々那が頷き、帰路についた。

妖遠の妖・どちらでもない存在・

「遅かったな、陰陽師」

フ

翔がキセルの煙を吐きながら言う。

「少し準備に手間取ってな…。そんなことより、何か分かったのか？」

「当然だ」

（さすがは妖…）

「これぐらいのことは、出来て当然だろう」

「…！」

翔が出の心の中を読んだように、そう言った。

「お前…覚か！？」

フ

煙を吐く翔。

「答える！」

「…愚問だな。そんなことは、自分の頭で考えろ」

あくまで白を切る翔。

「…まあいい。それで、何が分かったんだ？」

話を本題に移す出。

「俺たちが集めた情報をもとにするとだな…」

翔が少し下を見る。

「今日にもそいつは、修羅の妖になる」

翔が言い切った。

「…それは本当か？」

「こんなことで嘘をついてなんになるっていうんだ？」

飄々と構える翔。

「…だとすると、早く始末しないといけませんね…」

今まで出の隣で黙っていた律々那が口を開いた。

「ああ。次に奴が出てきそうなところは既に分かっている。

あとは、そこに行くだけだ」

翔がそう言い切った。

「ほう…。奴は必ずそこへ来る、と言っているようにも聞こえるが？」

「奴は必ず来る」

(尚も言い切るか…)

「分かった。そこへ案内しろ」

「言われなくとも」

翔たちは二人の陰陽師を引きつれ、その場所へと向かった。

月明かりが、闇夜を照らす。

「十六夜…いい月だ…俺がになるには最高の月だ…。天までもが俺が神になるのを祝福しているようだ」

血色に染まった刀を手に、男は言う。

「い…、いい…」

男の前で、首を横に激しく振る幼い子供。

その横には首のない女の死体が転がっている。

「よお、ガキい。久しぶりだなあ？俺のこと、覚えているよなあ？」

ぎやははっ、と下品に笑う男。

「さ、相模…大、二郎…」

「ぎやははっ、そうだぜえ！お前を殺そうとした、役人の相模大二郎様だぜえ！！」

後ずさりする子供。

だが、恐怖で体がうまく動かずその場に倒れこむ子供。

「死刑執行と行こうじゃねえか、ガキい!!」

相模が、血色に染まった刀を振り上げた。

「あばよ、ガキいいいいいいいい!!」

(神様:!!助けて!!)

恐怖で動くことも叫ぶことも出来ない子供は、ただ祈るしかなかった。

と、その時一つの銃声が聞こえ、相模は手を止めた。

「間に合ったようだな」

フ

屋根の上に立ち、キセルの煙をはく翔。

翔の右手には一丁の銃が握られていることから、先の銃声は翔が鳴らしたものであろう。

「役人が辻斬りとは…。しかも、幼い子供を殺して何になるというんだ?」

出が言った。

下では出と律々那がそれぞれ式神をいつでも出せるように構えている。

「役者はそろったああああ!!」

不気味な笑い声と共に言う相模。

「役者:だと?」

出が問う。

「十六夜の月、陰陽師、そして…」

翔を指差す相模。

「お前だ、妖遠の妖!!」

フ

「妖遠の妖…ね…」

「お前の血、陰陽師の血、そして十六夜の月…この三つがそろったとき、俺は最強の妖になれるんだ!!」

「妖遠の妖…？それが瞬、お前なのか…？」

出の真剣な眼差しが翔を見る。

「妖遠の妖…つてのはな、人でもなければ妖でもない…いわばどっちつかずの存在だ。…俺はそのどっちつかずの存在。どっちつかずには理由がある。いや…すべての物事には理由がある。俺という奇異な存在が生まれてしまった理由にも…な」

フ

「とりあえず、ガキは返してもらえたから、よしとするかな」

そういう翔の右手には、先ほどまで相模に殺されかけた幼い子が抱かれていた。

「お前、いつの間に…？」

「さてな…」

飄々と質問をかわす翔。

（まあ、いい…。それより今は

「お前を滅する方が先だ」

相模を見据える翔たち。

フ

翔がキセルの煙をはいた次の瞬間には、戦闘が開始されていた。

妖遠の妖・どちらでもない存在・（後書き）

長くなってしまい申し訳ない…。

「妖の巣食う屋敷」は年内最後の更新となります。
来年もどうぞよしなに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5072x/>

妖の巣食う屋敷

2011年12月29日13時49分発行